



メカ・デスゲーム



1

夏川 宙

メカ・デスゲーム

第I章

1

“メカ・デスゲーム ステージ1”を開始します。
ルールは、デスマッチ。

勝利条件は、100人存在するプレイヤーの内、あなたのみが生存する状況にする事。
あなたが勝利条件を達成した場合、あなたは、“メカ・デスゲーム ステージ2”へ進む事が出来ます。

ゲーム期間は、10日間。

ゲーム期間内に勝利条件を満たす事が出来なかったプレイヤーは敗北者と認定し、死刑に処します。

「……何だ？」

メカ・デスゲーム

人型機動兵器——全長5mほど——の腹部に位置するコクピット内で目をさました大學生、純平が、寝ぼけた顔で呟いた。

小麦色に肌を焼いた、男前だ。

眼前の巨大モニター——メインモニターの中央部に、ふざけたメッセージが表示されている。

——ここはどこだ？ 何かの操縦席のようだが……

くそっ！ 頭がズキズキする。

……カレー屋で水を飲んで急に眠くなったところまでは、覚えているんだが。眠り薬が混ぜられていたのか？

「私は、この機動兵器《オーディナル》のガイドAI「リニス」。貴様の御守役だ」
4点シートベルトで体を固定されて純平が座すシートの、ヘッドレスト横に設置された2つのスピーカーから、合成音声が発せられた。

「……AIだと？……ここは、どこだ？」

「秋葉原だ」

純平が、メインモニターを注視する。

「……確かに、アキバだ。しかし、昼間なのになぜ誰もいない？」

「その質問には、答えられん」

メカ・デスゲーム

「……俺は、家に帰る」

「メカ・デスゲームの全ステージをクリアしない限り、それは不可能だ」

「なぜ、俺がそのわけの分からんゲームをしなけりやならん？」

「回答不能」

「とにかく、俺は帰るぜ！」

純平が、そそくさとシートベルトを外し始める。

「電撃！」

「うわっ！」

電流が、純平の体中を駆け巡った。

ビリビリと痺れる唇が、動きはじめる。

「何しやがる！」

「メカ・デスゲームから逃れる事はできん」

「ちきしょうっ！」

「——死にたくなければ、まずは『オーディナル』の操縦に慣れることだ」

「死にたくなければ？ 物騒な！」

「メカ・デスゲームの説明文を、読んだらろう？」

「悪ふざけだろ？」

メカ・デスゲーム

「違う」

「本気で、俺に人殺しをしると言ってるのか？」

「人殺しをしると言っているわけではない。お前が1人のプレイヤーも殺すことなくステージ1をクリアする可能性も、存在する」

「……ほんとか？」

「お前との交戦によって損害を受けて逃走した敵機動兵器をお前が全て見逃し、お前以外のプレイヤーによってそれらのパイロットが全員殺害され、お前が勝者となるケースなどだ」

「……最低限1人は俺が殺さなければ、俺は勝者にはなれんだろう？」

「いや。お前が1人も殺害せずに97名死亡・残り3名の状態で、お前以外の2名のプレイヤーが相打ちとなって死亡した場合、お前がステージ1の勝者となる」

「……なるほど。だが、俺が1人も殺さずに勝利する確率は、かなり低いだろ？」

「回答不能」

「ちっ」

「《オーディナル》の操縦方法を、説明する」

リニスの説明を受けた純平は、秋葉原の街の一角——人っ子一人いない——を、《オー

メカ・デスゲーム

デイナルを操縦して、ブースト、ジャンプなどを織り交ぜつつ移動してまわり、各種ウエポンを試し撃ちしてみた。

人型ロボ《オーデイナル》は、標準的な機動兵器で、センサー能力・ステルス性・スピード・ブースト能力・ジャンプ能力・運動性・打撃力・耐久力ともに平均的な性能だ。

機体は、ライトブルーメタリックを基調としたカラーリングを施されており、その外観は、“格好良い”という表現が相応しいものである。

武器はマシンガン、LRM（ロングレンジミサイルランチャー）——左肩上面、ビームソードを装備しており、左手にシールドを握っている。

このメカ・デスゲームには、4脚・6脚・ホイール・キャタピラ・ホバー走行タイプ、飛行タイプ、重量タイプ、軽量タイプ、変形タイプなど、多種多様な機動兵器が用意されている。

《オーデイナル》が、片道1車線道路を疾走して、ヨコバシカメラマルチメディア館を背にし、背部ノズル2基に青白い輝きを灯して、JL線鉄道の線路をジャンプで飛び越え、クロスゾーンSDXビル脇の車道に、轟音をたてて着地した。

——操縦方法もインジケータ類も、とても簡略化されている。例えるなら、マニアックな筐体ロボゲーってところだな。

メカ・デスゲーム

「だいぶ、慣れてきたぜ」

「まだまだだ」

「けっ！」

純平が吐き捨てた直後、不意に、前方右手に位置するメデアマップピルの陰から、ダークブルー・細身・逆関節脚の巨大ロボ——《スマータ》が飛び出してきて、《オーディナル》の方へ素早く向き直った。

《スマータ》は、耐久力が低い、センサー能力・ステルス性・スピード・機動能力に秀でている。

「てめえも、俺を撃つ気だなッ！」

《スマータ》の前面スピーカー群が、大音量の音波を送りつけてきた。

このロボ、右腕が無^ねえ。攻撃されたようだ。左手には何も持ってないな。

「撃たねえよ！ 落ち着けっ！」

「ウソこけッ！ だまされんぞッ！」

「ウソじゃねえって！」

「わ——ッ！」

《スマータ》の頭部バルカン砲が、けたたましい音をたてて火を吹いた。多数の実体弾が、雨あられと《オーディナル》に襲いかかる。

メカ・デスゲーム

《オーディナル》腹部前面装甲が連続して被弾し、薄い白煙が上がり、コクピットが揺れる。

「ぐわっ！」

「死ねッ！」

《スマータ》コクピット内で、小太りの若い男が、細い両眼に邪悪な光を宿し、ニヤリと唇の片端を吊り上げた。

「調子こいてんじゃねえ！ このボケが——っ！」

激昂した純平が、マシンガン発射トリガーを引く。

《オーディナル》の黒いマシンガンが、報復の咆哮を上げた。

連射された弾丸群が、《スマータ》腹部——損傷し、すすのようなものが歪いびつに付着している——へ、吸い込まれるように着弾する。

「あああああああああああッ！」

コクピットがガクガクと激しく揺動し、小太りが丸顔を引き攣らせる。

メインモニター左下に表示された、《スマータ》前面画像の腹部装甲パートが、オレンジからレッドに変色した。

ついに、1発のマシンガン弾が薄い前面装甲を突き破り、小太りの突き出た腹を抉つた。

メカ・デスゲーム

「ふいッ！」

大量の鮮血がコクピット中に飛び散り、小太りは冥土めいどに旅立った。

《オーディナル》のメインモニターが、美しい夕焼け空のもと、仰向けに倒れた《スマータ》を映し出している。

前面装甲はズタズタに引き裂かれ、コクピットは血まみれである。

小太りの体は、今や小さな肉片と化して、コクピット内に飛散している。

「……俺は……人を……殺やっちゃまったのか？」

吐き気をこらえながら、震える声で、純平が言葉を紡いだ。

「その通り。残りプレイヤーは、94名」

と、機械的にリニス。

「くそっ！ 何なんだ、このゲームはっ？」

メカ・デスゲーム

本作品はフィクションであり、
実在のいかなる個人・
集団とも一切関係ありません。

メカ・デスゲーム 1
<http://p.booklog.jp/book/68089>

著者：夏川 宙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/zcfzv5dyrd/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/68089>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/68089>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ